ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：国際日本学部　名前：松本 剛次　作成日：2023 年 12 月 16 日

１．教育の責任

日本語・日本語教育担当の教員として、日本語教員養成課程内の授業に加え、留学生への日本語教育を担当している。短期大学の留学生日本語コースのコーディネータとして、日本語の授業全体のコースデザインも担当している。加えて「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」の担当教師として、１年生への初年次教育も担当している。

2023 年度の担当授業は以下のとおりである。

＜春学期＞

「キャリアデザインⅠ」「日本語教育における言語と心理」「日本語教育における社会と文化」「日本語総合 BⅠ（2 クラス）」「日本語総合演習ⅠC（短期大学授業）」

＜秋学期＞

「キャリアデザインⅡ」「外国人に教える日本語」「社会言語学概論」「日本語総合 BⅡ（2 クラス）」「日本語総合演習ⅠE（短期大学授業）」

２．教育の理念

大手前大学のディプロマ・ポリシーに賛同し、学生の以下の能力の向上につながる授業を心掛けている。

・専門分野における知識と以下に示す 10 の能力を修得し、それらを駆使して思考し、決断し、行動して社会に貢献する。

(1) 社会性基盤能力：チームワーク、社会的責任能力

(2) 思考基盤能力：創造力、計画力、論理的思考力、分析力

(3) 行動基盤能力：コミュニケーション力、プレゼンテーション力、リーダーシップ、行動力

・自ら問題を発見し、多様な人々と協働して問題を解決する。

・豊かな人間性、高い倫理観および社会的責任感を有する。

日本語・日本語教育担当の教員として、学生の当該分野の知識と技能を伸ばすことと上記の能力を伸ばすことは両立できると考えている。なぜなら、日本語教育という分野自体が上記の能力すべてが必要な分野だからである。よって、自分自身の教育実践そのものが、自分自身の上記の能力を伸ばすことにもつながる。

３．教育の方法

授業科目によりやり方、教え方は様々なので一概には言えないが、講義科目であっても、受身型ではない、参加型の授業を心掛けている。具体的には、「日本語教育における言語と心理」「日本語教育における社会と文化」では、グループ・ディスカッションを積極的に取り入れ、「外国人に教える日本語」ではワークシートを用いた日本語の文型分析や初級日本語授業のデザインづくりの活動を行い、「社会言語学概論」ではいわゆる反転学習の考え方を取り入れ、学生に教科書に書かれている内容についてグループでパワーポイントを用いての発表をさせてから、解説や補足説明を行う、といった活動を取り入れている。また、「日本語総合 BⅠ、BⅡ」「日本語総合演習ⅠC、ⅠE」といった留学生対象の日本語の授業においても、ニュースビデオを見せた上でそのテーマについて議論し、レポートやスピーチにまとめるといった活動を行っている。

すべての授業において、授業で使ったパワーポイントや資料は毎回、el-Campus にアップし、学生が後から見直すことができるようにしている。課題や教室活動で使用したワークシートなども、すべて el-Campus を通してダウンロード、アップロードするようにしている。また microsoft teams も活用し、el-Campus ではできない部分を補っている。例えば、el-Campus では他の学生の提出物をみることはできないが、teams ではお互いに書いたものや作ったものを見て、コメントすることができるし、またパワーポイントを一緒に作成することもできる。このように ICT の利用も積極的に取り入れている。

大学名：大手前大学　所属：国際日本学部　名前：松本　剛次　作成日：2023 年 12 月 16 日

４．教育の成果

本ポートフォリオ作成時点では春学期のデータしかないが、当然ながら授業に出席し、課題もこなしている学生はこちらが期待するレベルにまで能力、技能を高めることができている。つまり目標は達成でき、成果を上げることもできている。学生の授業アンケートによると講義科目についてはレベル 200 の授業については「授業内容が難しかった」という意見も散見された。しかし、これらの科目は日本語教員養成課程内にある科目であり、日本語教育能力試験合格に相当するレベルを目指しているものであり、日本語教員養成課程のレベル 100 の授業を履修していなければ難しいと感じるのはある意味当然のことである。その意味では学生の「計画力」は育成できていないとも言えるが、これは授業単位ではなく大学全体で取り組むべき課題であろう。一方、「留学生対象の日本語の授業については学生の授業アンケートによる評価も高く、成果を上げるとともに満足度も上げることができたと自負している。

５．改善への努力と今後の目標

2023 年度は着任 1 年目ということもあり、いわゆる様子見の年であった。PDCA サイクルで言うと、まずは P（Plan）をやってみた（Do）段階であり、2 年目となる 2024 年度からが改善のための Plan を立て、それを実施（Do）し、Check し、行動（Action）するという段階となる。当然それを行うことが今後の目標であるが、具体的には「実践研究」「アクション・リサーチ」という形となろう。すべての授業においては無理としても、いくつかの授業では実際に授業研究、アクション・リサーチを行い、それを学会などの場で発表する予定である。

【添付資料】

担当授業シラバス

担当授業学生アンケート結果

「外国人に教える日本語」授業用ワークシート